昭和25年3月14日　第三種郵便物承認　令和元年9月1日発行（毎月1回1日発行）通巻841号

禪の友

Zen no Tomo

9

September 2019

特集　両祖忌

【御征忌（道元禅師さまのご命日のご供養）】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二

長月の永平寺は、深山の樹々の影に坐し、涼々と静けさを伝えています。さて、九月二十九日は、永平寺のご開山道元禅師さまのご命日です。また、この日は、お釈迦さまから道元禅師さまに伝わったみ教えを、多くの皆さま方に広められた、總持寺のご開山瑩山禅師さまのご命日でもあります。その為、永平寺ではご開山さまをお偲びし、二十二日から一週間をかけてご供養のおつとめ（御征忌）をいたします。

さて、道元禅師さまが中国へ参られた際、食材の調達をしていた食事係の老和尚とこんな問答を交わしました。

道　元　「和尚さま！　食事係は他の者にまかせて坐禅や経文の勉強をしてはどうですか？　坐禅をし、経文を学ぶことが仏道修行ではないのですか？」

老和尚　「はっはっは！　そうではないぞ！　そこがわかれば本物なんだがなぁ」

―中略―

道　元　「では経文とは何ですか？　仏道（坐禅）修行とは何ですか？」

老和尚　「経文は、一、二、三、四、五だ、とらわれるな。仏道修行とはすべてだ！」

仏道修行とは、別れや悲しみの多いこの世の中を、何とか生きる、その生きることそのものだったのです。考えてみますと、お釈迦さまや歴代の和尚さま方は、もちろん経文を学び、坐禅修行をしましたが、多くの方々に寄り添い、人にも物にも優しく日々を過ごされたことでしょう。自己の願望や坐禅にすらとらわれず、皆と共に、生き生かされて何とか生きていく。そのことそのものが仏道なのです。

御征忌の月を迎え、皆心ひとつに、仲良く寄り添って生きていけます様にと、高祖真前に就いて心より願うものであります。

ご本山だより

大本山總持寺

【精進と不精進とによりて、諸仏、頭出頭没せり】

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一

法要後に御垂示をなされる禅師さま

九月の声を聞きますと暑さも凌ぎやすくなり、なんとなく心が落ち着いてきます。

冒頭の言葉は、總持寺開山・瑩山禅師さまのお示しです。

「私たち一人ひとりが精進するか否かによって、仏さまが現れたり現れなかったりする」という意味ですが、これから秋の辦道に勤しむとき、肝に銘じたいお言葉です。

さて、二十日（金）から二十六日（木）の一週間は秋のお彼岸会です。

お彼岸会は、もともと仏教徒が「六波羅蜜」を実行し、迷いの此岸から悟りの彼岸へ達しようとする修行期間でした。

六波羅蜜とは、布施（施し）、持戒（規律を守る）、忍辱（寛容）、精進（たゆまぬ努力）、禅定（心を静める）、智慧（正しい判断力）の六項目です。六波羅蜜には、すべてのものに感謝する精神が裏付けされ、現在ではご先祖さまへ供養やお墓参りを行うという形に変化してきました。しかし本来の意味に立ち返り、この機会に自分自身の心や生きざまを静かに見つめ直すことも大切です。

六波羅蜜の一つでもある精進のお示しを味わいながら、お彼岸の一週間を過ごしたいものです。

總持寺では毎日午後一時から法話、引き続き二時から施食会法要があります。法話は、担当の布教師ほか修行僧によるミニ法話も行われ、好評をいただいております。

特に、お中日の二十三日（秋分の日）には、江川禅師さまが大導師をお務めになられ、広い大祖堂が参詣者でいっぱいになります。

曹洞 俳壇

選・坊城俊樹

紫陽花や亡児に母のとし告ぐる

静岡県　堤　千春

評　「紫陽花」の想い出とは、いつも幼い子どもとの想い出につながる。その可愛らしい色彩や花弁のせいかも。幼い子を亡くした母にとっては、その想い出としたらあまりにも切ない。母はまた巡り会えた紫陽花の分だけ齢を重ねた。

隠岐見えて飛魚跳ぶ後ろ行く船ぞ

鳥取県　眞山　博充

評　「飛魚」は「あご」と読む。鳥取・島根県あたりの方言であろう。隠岐島への高速船だろうか。ものすごい速さで飛翔する飛魚を同じような速度で追って行く船の、爽涼感あふれる景色。「ぞ」という強調の係助詞が効果的。

◆梅雨晴れ間蝶が天より下りて来て　東京都　長谷川　瞳

◆滝壺の音より虹の立ちあがり　千葉県　甲斐　勇

◆万緑や振り子時計の通し土間　神奈川県　大竹　のり子

◆臨月の山羊の目うるむおぼろの夜　和歌山県　田﨑　よし子

◆制服の折目乱るる薄暑かな　青森県　中田　瑞穂

◆甚平を着て甚平と思はざる　静岡県　池谷　硬司

◆信濃路やまっ平らなる青田風　埼玉県　橋本　永子

◆軽鴨のえっちらおっちら藪を行く　神奈川県　池亀　惠子

◆薔薇供へ新元号を墓に告ぐ　静岡県　小泉　八千代

◆緑陰を選んで歩く右左　福井県　廣瀬　しのぶ

選者吟

帯塚の帯は夏帯なりぬべし

俊　樹

作句小見　この「帯塚」とは福岡県の都府楼址に隣接してある塚のこと。高浜虚子の帯を祀ってあると言われているが、はたしてそれが夏の帯であったかは作者としては曖昧である。ただどうも夏帯でないと存在が重すぎて句にならないのである。

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

補助輪の取れて得意の幼子はみどりの風と駆けて行きたり

鳥取県　眞山 博充

評　「駆けて行く」の「行く」に注目。恐らく補助輪付きの自転車に初めて乗ったときは作者のほうに向かって「来た」に違いない子。その子が「行く」と遠ざかった点に更なる成長を感じる作者。「みどりの風」も背中を押している。

習志野の学舎の庭の枇杷の実を友と数えた半世紀前

秋田県　小松 紀子

評　枇杷が実るころ、車窓などからその橙黄色の実が見えると何故か懐かしい気持ちになる。梅雨季の湿潤さと稍古風な色が追憶へと誘(いざな)うのかも。習志野は千葉県、枇杷の産地だ。

◆苗箱を載せて田植機滑るがに植えゆく早苗風にひらめく
岩手県　宍戸 さとる

◆バックホーに坐りっ放しの仕事終え子らに踏ませる疲れし腰を
岩手県　関合 新一

◆料理ならお母さんよりおばあちゃん十連休で孫の舌肥えり
奈良県　鈴木 重雄

◆われの棲む荒江(あらえ)とふ街そのむかし荒き波寄る入江なりしか
福岡県　三吉　誠

◆旧道の峠に残る石祠誰が参りしか苔払いあり
福島県　西木　甚

◆畦道をひとり占めして横たわる冬眠覚めし痩せ青大将
鳥取県　山本 浩一

◆近隣の八階マンション角窓の木漏れ日となり夕闇せまる
山口県　中井 清子

◆あらくさの生ひ茂るなか一株の真白きカラーは今年も咲きつぐ
静岡県　杉原 民子

◆若葉吹く柿の梢に日の射して蓑虫ひとつ動かざりけり
広島県　徳永 進一郎

◆八重桜・千本桜・滝桜　わたしの古里花いちもんめ
東京都　鈴木 正作

選者詠

針目孔(はりめど)に通らぬ糸と焦れるとき言葉うかばぬ一首のごとし　ちづ

作歌小見　今月の皆さまの作品は素材が豊富で楽しませていただきました。田植機やバックホーの機械を扱う歌、青大将や蓑虫の生きものの歌、故郷を離れて憶う歌や地名の由来を探る歌等々。どれも実感を伴っていて味わい深く思いました。

【作品お待ちしています】ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々にP23掲載の送付先までお送りください。